自由論題：**シリア知識人における「反復する暴力」の認識**

報告者：岡崎弘樹（日本学術振興会）

司会：梅田百合香（桃山学院大学）

当報告ではシリア知識人が、東アラブ、とりわけ1980年代以降のシリアをめぐって暴力や差別の反復現象、また犠牲者と加害者の交代過程をどのように理解し、概念化したのかについて考察を進めた。まず1970年代後半以降にシリア知識人が特に「歴史主義」の立場からアラブの国家論について考察を深めたものの、20世紀末の国際秩序の再編の中で、その後に訪れる対テロ・パラダイムに抵抗する上での十分な思想的武器を生み出せなかった経緯を確認した。しかし2000年代以降、国際環境をめぐってイスラエルを「善」、アラブの寡頭支配を「必要悪」、イスラーム主義を「巨悪」とする価値判断を伴う位階秩序が強化され、これに「内なる国家」の位階秩序が接続されている全体像について認識が深まっていったと指摘した。かくして2010年代において、①大国政治、②アサド＝バアス党政権ならびに域内の民兵＋ロシア空軍、③革命勢力、④イスラーム主義者、⑤クルド勢力による暴力液状化の5段階についてそれぞれの暴力が生じた具体的文脈に鑑みつつ、暴力反復の要因についてシリア知識人が深い洞察を示したと論じた。

この報告に対し、大きく4つの質問が寄せられた。

(1)暴力の反復現象と部族的（地縁・血縁的）紐帯との関係について問われた。報告者は、まずアサド政権の軍・治安機関要職がアラウィー派の一部の地縁・血縁関係によって分配されている事実はあるものの、歴史的に周辺化されてきた同派住民全体＝特権層という図式は当てはまらないと指摘。一方、伝統的な部族的紐帯は北東部の低開発地域で長らく政権の支持基盤として機能してきたものの、2010年代の急激な展開の中で反体制派やイスラーム主義勢力など忠誠の対象が目まぐるしく変わった経緯について語った。

(2)イスラームの宗教改革論の歴史的展開について質問が寄せられた。報告者は、自著の内容に触れつつ、「ルターの存在がフランス革命の前提となった」という見方が1870年代以降のイスラーム改革主義者よって提示され、理性と啓示の調和を求める思想潮流として確立し、20世紀以降も脈々と引き継がれているとの説明を行った。

(3)アラブの言論界におけるパレスチナ・イスラエルの「1国家2民族案」への応答について問われた。報告者は、シリア（ならびに周辺のアラブ諸国）の言論界ではナクバ以来「イスラエルVSアラブ」という図式を引き継ぎ、概してシリア（あるいはそれぞれのアラブ国家）との和平交渉やパレスチナ人帰還権が主題となっても、「1国家2民族案」はあくまでイスラエルとパレスチナ人当事者（あるいはシリアに拠点を置くパレスチナ諸派）の課題として副次的に扱われてきたと述べた。

(4)アラブの言論界でハンナ・アーレントは「親イスラエルの植民地主義者」とみられているかという質問が寄せられた。報告者は、アーレントの「植民地主義者性」が問われるのは主として欧米の言論界であるとの見方を示しつつ、シリアを含む東アラブ全域の混迷により新たなディアスポラが生じている中で、全体主義論だけなく無国籍者問題など近代国民国家の諸矛盾について先駆的な議論を提示したアーレントの著作多数が特に2010年代にアラビア語に翻訳され、一定のリスペクトを受けていると説明した。